

第218回くらしの植物苑観察会 2017年5月27日(土)

-梅雨の植物文化誌-

辻 誠一郎(東京大学大学院新領域創成科学研究科 教授)

梅雨という季節

日本の季節は、春、梅雨、夏、秋霖、秋、冬の六つからなるというのが私の考えです。沖縄は少し時期が早まります。北海道に梅雨はないと言われてきましたが、近年の環境変動を見ていると、台風だけではなく梅雨という季節が明確になっていくように思えます。六つの季節は何を意味しているのでしょうか。それは、雨の少ない季節と雨の多い季節が交互にやってくるのです。むかしからよく言われてきたのは春夏秋冬の四季ですが、日本の自然を特徴づけているのは、特別に雨が多いことであり、また、雨が集中する季節と少なくなる季節があるということなのです。これを降水の季節配分と呼んでいます。このような特徴的な自然は、日本に分布する植物群にも植生にも大きくかかわっているのです。この自然に融合している植物の代表的なものが、スギとブナだと言えるかもしれません。スギは梅雨と秋霖だけでなく、冬に雪として大量にもたらされる地域に集中しています。ブナは、冬に雪が多い地域に集中しています。ここで取り上げるのは梅雨ですから、スギが大きくかかわってくることになりますが、ひとまずスギは置いて、おなじみのアジサイなどについてみましょう。

ここでお断りしておかなくてはなりません。植物の名前はカタカナで表記します。必要に応じて漢字で表記しますが、たとえばスギを杉と表記すると、中国ではコウヨウザンという植物で、異なる植物になってしまうのです。また、漢字表記は地域によっても異なるので、混乱してしまいます。

アジサイ

梅雨ともなればどこへいっても鮮やかな花を咲かせているのがアジサイでしょう。アジサイは今では梅雨の花として欠かすことができませんが、園芸ブームを迎える近世以降、とりわけ近・現代に華々しく登場してきたといってもいいでしょう。よく知られるのがフィリップ・フォン・シーボルトのアジサイ好きです。『日本植物誌』で紹介したアジサイ仲間は12種ののぼり、日本に自生するほぼすべての種を掲載しています。ところが、アジサイとして記載したのは、ガクアジサイの園芸品種でした。現在、ブームとなっているのはガクアジサイの品種群であって、近代から現代に作出されたものが大半です。鎌倉をはじめ各地のアジサイの名所が登場するのは比較的最近のことなのです。そうは言ってもアジサイは、花が少なくなる梅雨においては、心に安らぎを与えてくれる際立った存在となっています。

近世以前のアジサイの記録はさほど多くありません。古代では「集真藍(あづきあい)」などと呼ばれ、しばしば使われる「紫陽花」は誤用で、使用すべきではありません。アジサイの仲間が多い中国では「紫陽花」はムラサキハシドイの仲間を指しているのです。

ウツギ

茎を切断すると中が中空になっているのでウツギ（空木の意）と呼ばれます。「卯の花」と書かれることもあります。このごろは開花が早くなって「卯の花腐し（くたし）」という季語が開花にマッチしなくなってきたように思います。真っ白な花が枝先にたくさん集まっていて、それがたわわに実った稲穂に見立てられました。そこで、むかしは水田の水の取り口に開花した枝が何本も立てられました。悪い虫が水田に入らないようにとの意味もあるようです。卯の花と言えば「卯の花の匂う垣根」がよく知られています。そこに「不如帰（ほととぎす）」の鳴き声。これは古代では決まり文句であったようです。この垣根が重要です。家の裏に生け垣があったり、また、水田や土地の境界に生け垣や単独木があったりします。悪いものが家に入らないように、そういう意味が込められているように思います。

信州安曇野のあたりでは、ウツギが咲くころ、幼児や児童にほうそうが流行し、これにかからないようにウツギの枝に紐を通して三角形にしたものを首や腰に提げて登校しました。治ると川に流したといいます。「ウツギほうそう」「ほうそう流し」と呼ばれました。

梅雨の花々

梅雨の季節は花が少ないように思えますが、人のかかわりをもつ植物は意外に多いようです。開花しても花が目立たないので、話題にならないのでしょうか。ドクダミ、ハンゲショウ、カラスビシャク、ウツボグサなどを取り上げて、雨の多いこの季節の日本人と植物のかかわりを考えてみましょう。

.....

次回予告 第219回くらしの植物苑観察会 2017年6月24日（土）

「古代の薬草と東アジア」 三上 喜孝（当館研究部 准教授）

13:30～15:30（予定） 苑内休憩所集合 申込不要